

## 自家中毒(アセトン血性嘔吐症・周期性嘔吐症)

### 原因

諸説があり未だ不明です。脂肪および炭水化物の代謝機構が乱れ、ケトン体が血中にたくさんでき、そのためにいろいろな症状がでるとされています。脳にある嘔吐中枢とケトース調節中枢の調節障害が推察されています。

### 誘因

遠足や発表会、カゼをひいた時など、肉体的・精神的なストレスが引き金になります。夕食を摂取せずに眠った翌朝に起こりやすいです。

### 患児の性格傾向

男子にやや多く、やせ型で、自律神経および情緒不安定な、神経質な子どもに起こりやすい。吐き続ける発作が、特定の子どもの何度も繰り返すので「**周期性嘔吐症**」とも呼ばれ、小児の心身症の一つにあげられています。第一子、一人っ子、末っ子が多く、内気で感じやすく、いらだちやすい、引っ込み思案の反面言い出したらあとに引かない、といった性格の傾向があるといわれています。

### 好発年齢

2～10歳位まで

### 症状

元気がなく食欲が落ちているなど思っていると突然吐き始め、吐くものがなくなっても吐き続け、胃液・胆汁を吐き、ひどくなるとコーヒー残渣様の吐物を吐きます。顔色は青くなってグッタリとして、顔つきは無欲状になり、ウトウトした状態になります。脂肪がエネルギー源として利用された結果、血中にケトン体が増え、息がリンゴの腐ったような臭いになります。尿にケトン体が多量に検出されるため「**アセトン血性嘔吐症**」とも呼ばれます。臍周囲の痛みや頭痛を伴いますが、下痢はなく、便秘傾向があります。

### 治療

グッタリしたり、食欲不振時にはジュースや飴などの糖分を与えて、子どもに安心感を与えて熟睡させると改善します。吐き続けるようになったら、全ての経口摂取

を中止します。ブドウ糖の点滴が必要になります。吐き気止めや鎮静剤も併用します。嘔吐が止まると砂糖水、果汁などを少量ずつ与えます。脂肪分は数日間、控えた方がよいでしょう。繰り返し起こしている子どもには、患児の心理的ストレスを改善するために精神療法も取り組まれています。普段より少しずつ身体を鍛えるようにし、過保護にしないように育児法を見直しましょう。但し、急激な鍛錬や過労は逆効果です。漢方薬で小児虚弱体質の改善薬である「小建中湯」が著効することも多いです。偏食や就寝前の高カロリー食の摂取を避けます。

#### 予 後

10歳頃になると、筋肉量が多くなるとともに、体重当たりのブドウ糖の必要量が低下するので自然に発症しなくなります。

(2002.8)